The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	情念の「しるし」あるいは症候学 : Les Charactères des Passions de M. Cureau de La Chambre : フランス17世紀の情念論の諸断面(2)
Author(s)	黒岡, 浩一
Citation	Gallia. 1999, 38, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7893
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

情念の「しるし」あるいは症候学：
Les Charactères des Passions de M.Cureau de La Chambre
― フランス17世紀の情念論の諸断面(2)* ―

黒 岡 浩 一

本論では、Martin Cureau de La Chambre (1594-1669) [以下、ラ・シャンブルと記す] の大著 *Les Charactères des Passions* (1640-1662)[1] [以下、*Les Charactères* と略す] について、その表題に含まれる語 « les Charactères » が意味するところを探ることによりこの情念論のはらむ意図・問題意識を吟味し、そこから当時の情念論が内包する問題系の一断面を明らかにしたい。

ラ・シャンブルは、le chancelier Séguier との出会いを契機に活躍の場をえて、Richelieu の庇護のもと、l'Académie Française の初代会員、le Jardin du Roi の « démonstrateur de l'intérieur des plantes » [実際は、解剖学教授として] に (ともに1635年)、その後、Louis XIV の侍医に (1650年)、王の寵愛のもと l'Académie des Sciences の初代会員に (1666年) なった、後世からは物活論者 vitaliste と見なされる医学者である[2]。その他の主要著作には、小品として *Traité de la connaissance des animaux* (1647)[3]、*Le Système de l'âme* (1664) があり、後に

---

* 本論は、拙論「フランス17世紀の情念論の諸断面(1)―― 序論的考察：J.F.Senault, *De l'usage des passions* を概観しながら――」(大阪大学文学会誌『待兼山論叢』、第29号、文学篇、pp.*71-83*) から始めた一連の考察の続編である。

1) 本論での引用出典は、*Les Charactères des Passions*, Amsterdam, Antoine Michel, 1658-1663, 5vols (4tomes) を用い、引用参照は巻数 (ローマ数字)・頁数 (アラビア数字) のみを記す (第1巻の頁付けのない Avis nécessaire au lecteur については、ANL と略記し、[ ] つきアラビア数字で該当箇所を表す)。引用の綴り字は現代表記に改めたが、著書名の表記については先行研究の慣例に従い « Charactères » に h を残し、この語はその綴り字のまま使用する。

2) 彼の経歴については、手軽には下記を参照のこと：*Encyclopédie philosophique universelle III : Les œuvres philosophiques Dictionnaire*, PUF, 1992, tome I (Philosophie occidentale : IIIe millénaire av. J.-C. 1889), p.1070 ; *Dictionnaire du Grand Siècle* (sous la dir. de F.Bluche), Fayard, 1990, p.440. また、académicien としての彼への賛辞としては、Condorcet, *Eloge des membres de l'Académie royale des sciences morts avant 1700* (1773) [*Œuvres de Condorcet*, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1968 (rééd. de l'édition Paris 1847-1849), tome II, pp.1-4]. ラ・シャンブルを主題とするあるいは主題として章を割いている研究論文には次の4つがある：R.Doranlo, *La médecine au XVIIe siècle. Martin Cureau de la Chambre, médecin et philosophe*, Paris, 1939 ; S.J. Anthony Levi, *French Moralists : the Theory of the Passions 1585-1649*, Oxford University Press, 1964 ; W.Riese, *La théorie des passions à la lumière de la pensée médicale du XVIIe siècle*, Bâle, S.Karger, 1965 ; A.Darmon, *Les corps immatériels, Esprits et images dans l'œuvre de Martin Cureau de la Chambre*, Vrin, 1985.

3) *Traité* は、*Les Charactères* の tome II (1645) で補遺とされたものが、1647年 (ただし、これはタイトルページの日付で、Privilège の日付は le 4 mai 1648、したがって出版は1648年) に独立して出版された。この小品でラ・シャンブルはデカルトの説に反して動物にもある種の推論能力があることを認めており、そこから明らかなように彼は anticartésien である (Cf., A.Adam, *Histoire de la Littérature française au XVIIe siècle*, éd. A.Michel, 1997, tome II,

見るように *Les Charactères* がその冒頭部分と計画された未完の大著 *L'Art de connaître les hommes* (en trois parties, 1659-1666) がある。

Les Charactères は5巻本で、各巻には次のようなテーマの章がある（下線は論者により、章番号のある章は，付き数字で、章番号のない章は）付き数字で表す)。

Volume I : 1.les passions en général, 2.l'amour, 3.la joie, 4.le ris, 5.le désir, 6.l'espérance.
II : 1.la hardiesse, 2.la constance, 3.la colère, (annexe : la connaissance des bêtes).
III : 1) la heine, 2) la haine des animaux, 3) la passion opposée au désir.
IV : 1) la douleur (la tristesse), 2) la douleur corporelle.
V : 1) les larmes, 2) la crainte, 3) le désespoir.

この章構成から窺えることに、第一に、当時多くの情念論で基本的に踏襲されているトマス＝アクイナスの11の主要情念 ── ラ・シャンブルの用語では「単純情念」« les Passions Simples » (I, ANL [8]) と呼ばれる ── の分類・秩序(順序)から，かなりズレた分類が行われている[4]。第二は、通常情念とは見なされないものが情念と並列して章だてされている点で[5]、ここで特に注目したいのは「笑い」« le ris »・「涙」« les larmes » （上記下線部分）が情念として論じられていることである。ラ・シャンブルは「笑い」について次のように述べる。

Car je ne considère pas le Ris comme un pur effet corporel ; mais j'y comprends l'émotion de l'âme qui le cause, & en cette considération il peut passer pour une passion particulière & pour une espèce de la Joie. Ne t'arrête pas pourtant à cela, il

---

pp.426-427 [Première édition, Domat, 1951-1952, tome III, pp.20-21])。

4）トマスは、主要概念として、「欲求的」« concupiscible » 情念6つ（「愛」/「憎しみ」、「欲求」/「忌避」、「快(喜び)」/「苦(悲しみ)」)、「気概的」« irascible » 情念5つ（「希望」/「絶望」、「恐れ」/「大胆」、「怒り」）の計11を挙げ（/は対立あるいは反対情念)、それらに上記の順序どおりの秩序を認め、その順序に従って各主要情念を論じる（Cf., *Summa Theologiæ*, Prima Secunæ, QQ.22-48)。ラ・シャンブルは、主要情念の枠組みはそれを踏襲するが（I, ANL [8-9])、共通点をもつ理解しやすい情念があり、対立情念ごとよりも情念の対象ごとの方が完全に理解されるとの考えから、上記の構成のようにする（I, ANL [11] : « *Et parce que leurs mouvements* [=des passions] *ayant beaucoup de convenance ensemble se font connaître l'un l'autre, & forment ainsi des Idées de chaque passion plus parfaites que si on les mêlait avec leurs contraires. Tu verras donc ici les Passions qui ont le bien pour objet, savoir est* l'Amour, la Joie, le Ris, le Désir & L'Espérance »)。ラ・シャンブルによる「単純情念」の分類・秩序は、彼の情念観を厳密に吟味する上で重要な手がかりと思われる情念の « mouvement » の概念を解明する格好の主題であるが、紙面の都合上、本論では割愛し、別の機会に論じたい。

5）III の2) la haine des animaux については注3）で述べたように aniticartésien の主題の一端として理解することもできよう。また、IV の6) la douleur corporelle は上に述べる「笑い」「涙」の場合の延長として考えることができよう。しかし、II の2.la constance については、通常「徳」とされるものである。これが情念とされる点に関しては、情念・徳・悪徳など後にみるラ・シャンブルの « les Actions Morales » の概念を把握する上で重要な事柄であるが、本論では割愛し、別の機会に論じたい。

est indifférent pour mon dessein, que c'en soit une, ou que ce n'en soit que l'effet : [...] (I, ANL [11-12])

当時の情念論では、「笑い」は、情念に伴う外的徴候として論じられることがあっても、情念と見なされることはない。さらに、「笑い」とその原因となる「魂の情動」とは直結しているわけでなく、後者から前者に至るには様々な要素の介入がある[6]。それをあえて「魂の情動」の観点から「喜び」の特殊情念と見なすだけでなく、先の構成表から明らかなように基本的に「単純情念」ごとによる章構成の中でそのような特殊情念にわざわざ章を割いているのである（「涙」についてもほぼ同様に「苦（悲しみ）」の特殊情念とされる。Cf., V, pp.7-12.）。しかも、引用末にあるように、「笑い」が情念であろうがその結果であろうが « mon dessein » には関係ないとの言明は、情念を逸脱していようがあえて情念として扱うことを意味し、« les Passions » そのもの以上に « les Charactères » という概念にこの作品のねらいがあることを示している。以下、第1巻 Avis nécessaire au lecteur、Chapitre I : *Quels sont les Charactères des Passions en général* を詳細に分析し、その概念のはらむ問題を考える。

☆　☆　☆

C'est donc une chose certaine, que le corps s'altère & se change quand l'âme s'émeut, & que celle-ci ne fait presque point d'actions qu'elle ne lui en imprime les marques, que l'on peut appeler Charactères, puisqu'ils en sont les effets, & qu'ils en portent l'image & la figure. (I, p.2)

« les Charactères » とは、魂が作用する際に必ず身体に刻印する「印」のことである。これについて話を進める前に、幾つかの前提を確認しておこう。

第一に、ラ・シャンブルは、スコラ的伝統の厳密さに囚われないことを何度か表明しながら（例えば、I, ANL [12]）、魂・心身関係についてその伝統をゆるやかに継承している。人間の中には「知的欲求」« l'appétit intellectuel »（= la volonté）と「感覚的欲求」« l'appétit sensitif »（= les passions）の2つの欲求とがあることを認め、さらに、前者については、« les actions justes & injustes » に関わるような « le mouvement qui agit » を持たない « Actions ou Opérations » と、善悪に関わり « le mouvement qui agit » を持ち「感覚的欲求」たる情念と似ているが「身体の変調」« l'altération du corps » を伴わない « Passions » とに分ける（I, ANL [6-7]）。

6）当時、笑いの身体的原因は脾臓に帰され、胆汁・血液と幾つかの段階を介して生じているとされていた（Cf., *Descartes, Les Passions de l'âme*, introduction & notes par G.Rodis-Lewis, Vrin, 1991（nouvelle éd. revue de l'éd. 1955）, p.155, note 1）。

しかし、第二に、「知的欲求」も、「感覚的欲求」と同様に「欲求的」部分・「気概的」部分に分けられ ── これはスコラ的伝統の拡大解釈といえる ──、「知的欲求」の « Passions » も「感覚的欲求」の「情念」と同様に扱われ (I, ANL [8])、知的な情念・情動に関する意識が希薄である。これは、感覚が作用することなく知性が作用することはないと考える彼の強い感覚優位主義的立場の反映である (I, p.2 : « l'entendement ne saurait agir si secrètement que les sens ne s'en aperçoivent »)。

第三に、デカルトが登場するまで魂および心身関係は常に曖昧であったが、それにもれずラ・シャンブルでは、魂は必ずしも意識的かつ意志的能動主体ではない。« les actions » の語用に注目すれば、« les Actions Morales » という概念のもと「情念」・「徳」という魂の受動・能動現象が並列されたり(この語は、多くは、「能動」ではなく「作用」の意で用いられる)、また、すぐに見るように、身体の「随意運動」« le mouvement volontaire » も場合によっては[7]、あるいは、次の引用に見られるように、そうでない「精気」« les esprits » による ── 魂に意図があるのだが魂が必ずしもそれには気づかない ── 運動も、「魂」を主語にして説明される。

> Et sans que l'âme s'aperçoive même de ce qu'elle fait, elle dispose les parties en telle manière, que par le maintien & la contenance qu'elles prennent, on peut juger si ses actions sont bonnes ou mauvaises. (I, p.2)

第四に、この引用では、無意識的運動だけでなく、一つに、先の独立引用にあったのと同じく魂の動きが身体的変化・運動と直結し、後者の運動が魂の作用の善悪の判断材料であることが述べられている。この直結に関して、ラ・シャンブルは、第1章冒頭で、« elle [=la Nature] a encore voulu imprimer sur son front [=de l'Homme] & dans ses yeux les Images de ses pensées » (I, p.1) と述べ、魂の中の「情念」だけでなく「徳・悪徳」もその作用が、魂が気づく以上に、顔や身体に十全に伝わることを強調している (I, pp.1-2)。だが、一般には、魂と身体の間にはしばしばズレあるいは誤謬が生じることが認められているではないか?

Les Charactères では、この問題は、身体の運動を「随意運動」と「精気」による運動に分け、説明されている。「随意運動」については、本来的には誤謬を犯さないものであるが[8]、魂が自らの内で引き起こす運動の帰結として「ある種の必

---

7) Cf., I, p.12 : « elle [=l'âme] fait encore mouvoir les parties qui sont capables du mouvement volontaire ». *Les Charactères* での「随意運動」は、引用のように、現代でいう「随意筋」などのように意志的に動かせるものを指す場合もあるようだが、そのような観点よりもむしろ、良いものを求めたり悪いものを避けたりする身体的反応として捉えられているようである(注8) 参照)。

8) Cf., I, p.13 : « Mais il n'est pas ainsi du mouvement volontaire : Car en effet les mains attirent & prennent ce qui est utile ; le corps se porte vers ce qui est aimable ; Il s'éloigne

然さにより」誤謬が生じることがあるとされる[9]。他方、ラ・シャンブルにとって「精気」とは、魂が意図を抱くところで生じ（この点が彼が vitaliste とされる最たる点であるが）、その意図を最初に認識し、外面的に表出あるいは実行するための流動性の高いものである[10]。「精気」の運動の誤謬は、すでに目的をもっているはずの「随意運動」に「精気」が関与した場合や、「精気」が魂の意図を実行する際に魂の提示した対象が実在しない場合などに、魂の意図を実現するよりも魂の早急さや無分別さを示すものとして生じる[11]。したがって、魂の意図を最初に認識する「精気」そのものには欠陥はなく、魂の意図は身体的変化・運動にそのまま直結的に反映されることになる。*Les Charactères* では、以上のような魂概念、心身関係に基づいて議論が展開されている。

« les Charactères » に戻ろう。魂の作用の「印」である « les Charactères » は、それが魂で生じるか身体で生じるかによって、« les Charactères Moraux » と « les Charactères Corporels » との２種に区別される（I, p.3）。身体への印をこのように分類することはデカルト以降の魂・身体の近代的概念に慣れている者には奇妙に思えるが、怒れる人の例示的説明を参照しながら、両者がどのようなものかを見てみよう。« les Moraux » とは、罵倒・叫び・性急さ・行動に現れる荒々しさなど（これらをラ・シャンブルは « les Actions Morales » と呼ぶ）、情動「怒り」に続いて魂が「明晰かつ判明な認識をもって」引き起こし、「感覚的欲求」の内部的変調を顕にする外面的行為であり、情念を感じる魂が望む主要目的に役立つ一連の « actions » のことである[12]。他方、« les Corporels » とは、赤面・瞬き・眉間の皺・恐ろしい目つきなど、魂が「純粋な本能で」用いることもあれば、魂の意図なしに必然的に生じることもある「身体の変化・変調」であり[13]、« l'Air »の概念

---

véritablement de ce qui est mauvais ; il fuit ou chasse ce qui l'incommode. »

9) Cf., I, p.11 : « C'est par une certaine nécessité qu'ils [= les erreurs du mouvement volontaire] viennent en suite des mouvements que l'âme excite au dedans. »

10) Cf., I, p.11 : « Or les Esprits sont sans difficulté les premiers dont elle [= l'âme] sert, à cause qu'ils sont les plus mobiles, & qu'ils prennent leur naissance au lieu même où elle se forme ses dessins : de sorte qu'il ne faut pas s'étonner s'ils sont les premiers à les exécuter, puisqu'ils semblent être les premiers qui en ont connaissance. / L'âme porte donc les esprits au dehors, & les répand sur les parties extérieures, [...] ». なお、「流動性の高いもの」と曖昧に記したのは、物質的 matériel であるとはされていないからである。この点も含め、ラ・シャンブルの作品における「精気」については Darmon が前掲書で詳しく論じている。本論では、「精気」についてはその前掲書ではあまり明示されない誤謬に関する点などを論じるに留める。

11) Cf., I, pp.11-12 : « ce mouvement [= le mouvement volontaire] des Esprits est souvent un secours bien inutile à l'âme, & qui sert plus à marquer sa précipitation & son aveuglement, qu'à obtenir ce qu'elle s'est proposé. [...] Et quel effort peuvent-ils [= les esprits] faire pour repousser un mal qui n'est le plus souvent que dans l'opinion, qui quelquefois n'est plus, ou qui même n'est pas encore fait? ».

12) 最終的には次のように定義される : « ceux [= les mouvements] que l'âme emploie par une connaissance claire & distincte pour obtenir la fin qu'elle prétend en chaque Passion, sont les Charactères Moraux » (I, p.14) .

13) Cf., p.14 : « ceux [= les mouvements] dont elle [=l'âme] se sert par un pur instinct, ou qui surviennent sans qu'elle ait intention de les faire, sont les Charactères Corporels : Car ces

(I, p.2) とされている。*Les Charactères* は、このような計画の第一段なのである。

☆　☆　☆

ラ・シャンブルの大計画で情念が第一部とされるのは、« l'essence des Actions humaines consisite dans l'émotion intérieure que l'objet forme dans l'appétit » (I, p.3) と考えられているからである。この考えは当時の殆どすべての情念論の共通的基本認識であると言える。また、道徳哲学と医学 —— 魂と身体 —— との両面から情念を捉える試み[18]も珍しくない。しかし、*Les Charactères* には、他の情念論ではしばしば核となるはずの情念統御に関する章がなく、それへの言及が明らかに少ない。このことは、上の考察からの明らかな帰結であり、*Les Charactères* が当時の多くの情念論とは情念を取り上げる姿勢の点で異なることを示しているように思われる。情念は魂あるいは心の内部の事態であり、それに伴う身体的変調も身体内部の事態であり、つまり情念に纏わる事態は己の内なる問題である。情念統御に関する言及は、たとえキリスト教やストア派の影響を受けた何らかの外的規律があるにしても、自己の内的な事態を自己がいかに規律するかという議論であり、情念を被る主体の立場から情念を取り上げる考察と言える。*Les Charactères* で —— ラ・シャンブルは情念の善用・悪用により幸福・不幸がきまることを主張しているが[19] —— そのような考察が少ないのは、人間全般を外面的に認識する術の第一部として、情念そしてそれを被る人間を「しるし」の観点から客体として捉える姿勢が強く貫かれているからである[20]。

このような姿勢は、先に引き合いに出したデカルトの —— たとえ情念を被る人間を観察し分析する箇所が『情念論』にあるとしても —— 非常に独我論的な姿勢とは対極をなすものと言え、当時の人間理解の仕方の一つのあり様を示すと同時に、人相学や徴候学など18世紀以降盛んになる外面からの人間理解研究の、一つの源流として歴史的に注目する価値があるように思われる。そして、これら2つの姿勢 —— 内からか外からか —— は、人間理解に常につきまとう問題でもあり、両者を共時的に含む時代思想の考察にとっても興味深い観点となる。

(大阪大学文学部助手)

(本稿は、平成10年度文部省科学研究費奨励研究(A)による研究成果の一部を成すものである。)

---

18) Cf., I, ANL [14] : « ce [= les passions] sont des Actions communes à l'âme & au corps, et il faut que la Médecine & la Philosophie Morale se secourent l'une l'autre pour en parler bien exactement ».

19) Cf., I, ANL [15] : « dont le bon ou le mauvais usage [des passions] fait tout le bonheur ou le malheur de la vie ».

20) このように外面的な「しるし」から人間を捉える発想は、Gassandi などの当時の唯物論者にも顕著である。しかし、ラ・シャンブルは、その「精気」観からも明らかなように、必ずしも唯物論者ではなく、彼と当時の唯物論者との関係は、重要なテーマであるが、別の機会に論ずることにする。